
コンセント

辻内英祐

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

コンセント

【Nコード】

N4084A

【作者名】

辻内英祐

【あらすじ】

天井近くの壁に有るコンセント。辻内君は、そのコンセントが気になって仕方ありません。ある日、遂に、辻内君は、そのコンセントをじっくりと観察してみたのです…

壁に、2つ、穴が開いています。それは、プラグを差し込む穴です。

僕の部屋には、コンセントが3つ有ります。1つは勉強机の後ろに、もう一つはテレビの後ろに、最後の一つは、天井近くの壁に有ります。

天井近くの壁に有るコンセントは背伸びをしても届かない程、高い所にあるので、まだ1度もプラグを差し込んだ事はありません。

僕は最近、やたらと、天井近くの壁に有るコンセントが気になって、勉強、テレビ、読書…何をしている最中でも、ふと、そのコンセントの方へ目を遣ってしまいます。

ある日、僕は、遂に、そのコンセントに対する、得体の知れない欲望に負けて、壁の前に椅子を置くと、椅子に上って、そのコンセントをじっくりと観察してみました。

それは、何の変哲も無い、ただのコンセントでした。

そうして数分、椅子の上に立って、ぼんやりとコンセントを眺めていると、ふいに、縦長の2つの穴に触れてみたくなりました。

右の穴と、左の穴、どちらに触れるか迷いましたが、結局、右の穴に触れてみることにしました。

触れてみると、人差し指が縦長の穴に食い込んで、そのまま、穴の中へ吸い込まれてしまいそうな気がしました。と、どうやら、本当に吸い込まれているようでした。

右手の人差し指から、腕、頭、胴体、そして、左足の親指…案外、簡単に吸い込まれたので、驚きました。

先程、僕が吸い込まれた、2つの穴から、少し光が漏れています。今僕が立っている、薄暗いこの場所は、僕の部屋の壁の裏側ということになります。

「辻内君」

と、ふいに、誰かに僕の名前を呼ばれたので、心臓が、ドキッ、としました。

「辻内君」

声のする方を、振り返ると、すぐ目の前に、見知らぬ男が立っていたので、また、ドキッ、としました。

「ここは壁の裏側だよ。信じられない事に、本当に壁の裏側なんだ。驚いただろう？」

ここが壁の裏側だという事よりも、見知らぬ男が、僕の部屋の壁の裏側に住んでいた事のほうが驚きでした。

「さて、それでは早速、壁の裏側を案内しよう。
ここは、いつも、薄暗いから、このランプを持って…そう、ほら、
明るいだろ…。」

オレンジ色の光が壁の裏側を照らしだしました。

机、椅子、本棚…

「この場所は非常に静かだからね…僕の書斎なんだよ。」

本棚には、たくさんの本が並べてありました。

「辻内君」

僕は、とても本が好きだったので、本棚の本に気を取られていました。

もう、ずっと向こうの方で、男が、僕を呼んでいる声が聞こえたので、ハッ、として、声のした方まで走っていきました。

「この階段を降りて行くと、辻内君の部屋の、丁度、テレビの後ろだよ。」

男の後ろについて、階段を降りていくと、ガシャンガシャン、と音が聞こえてきました。

「プラグを差しっぱなしにすると、プラグに電気を送る装置がずっと稼働しているので、とても煩いんだよ。今は、テレビが切れている状態だからまだマシだけどね…テレビの電源をつけると、もっと電気が必要になるからもっと煩いんだよ。」

なんだか、とても申し訳ない気がしました。これからは、テレビを見ない時は、ちゃんとプラグを抜こうと思いました。

「辻内君」

名前を呼ばれたので、ハッ、としました。僕は、一人でぼんやりと考え込む癖がありました。

「このまま、まっすぐ行くと、丁度、勉強机の裏側だよ。」

僕は男の後ろについて歩いていきました。勉強机の裏側に着くと、ふわふわした、綿のようなものが、そこらじゅうに敷き詰めてあります。

と、鼻がムズムズしてきました。

「これ以上、ここにいると、僕も、辻内君も、鼻がムズムズしてしまつて、耐えられなくなるから、引き返そうか…。ここは、僕が、いくら掃除しても、こうなんだよ…。」

僕はまた、申し訳ない気持ちになりました。ふわふわした、綿のようなものは、全て、ホコリでした。

これからは、部屋の隅々まで、ちゃんと掃除しようと思いました。

「辻内君」

僕は、ハッとしました。

声のする方を振り返ると、男がすぐ目の前に立っていました。

「お願いがあるんだがね…。」

男は、更に僕に近付いて言いました。

「辻内君は、最近、やたらと、僕の書斎…いや、天井近くの壁に有るコンセントが気になっているようだね。

僕は毎日、君が、このコンセントに、何かのプラグを差したがって
いるんじゃないかと…コンセントは本来、プラグを差すものなのだから…いや、つまり、僕のお願いというのは…」

僕は男の願いが何か、よくわかったので、うんうんと、笑顔で頷くと、男は嬉しそうに笑いました。

「それでは、辻内君、約束だよ。僕と辻内君の秘密の約束だ。」

そうして、僕と男は、書斎まで戻ってきました。
僕は男にお別れの挨拶をして、縦長の穴に触れました。今度も、右の穴に触れました。

僕は自分の部屋に戻ってきました。
そうして、早速、テレビのプラグを抜きました。

天井近くの壁に有るコンセントは背伸びをしても届かない程、高い所にあるので、これからも、プラグを差さないことにしました。

秘密の約束を僕はちゃんと守るつもりです。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n4084a/>

コンセント

2011年10月3日05時45分発行